する創
鬼海
6円）
の都市

ずべし。余はわが文を以て百代の後に伝えんと欲するの野心家なり」。小説家としての長期的視野と鋭い歴史感覚。漱石作品の息の長さは、100年後を意識した未来への姿勢にある、というのが、著者の最も言いたいことだったのだろう。（倉）

妻ら再演に尽力した人々の論考や資料からその人生と「河」の軌跡をたどった。人物伝と作品紹介にとどまらず、戦後広島の同時代史であり、平和運動のあり方も問う一冊だ。

「河」の舞台は朝鮮戦争直前からの4年間。峠のもとに集った広島の若

た。大会は冷戦下の政治的な路線対立から分裂し、その後は国民運動としての力を失ってゆく。ヒロシマは、なすべき使命を果たしてきたのか。被爆70年余りを経て再演された意味は、原点に立ち返ることを迫るメッセージに他ならない。（宇）

加藤陽子評

皇室財産の政治史

明治二〇年代の御料地「処分」と宮中・府中

池田さなえ著（人文書院・7344円）

人にものを教えるのは難しい。「これを教えなければ」と身構えれば相手は逃げてゆく。だが例えば、面白さのオーラを全開にしていれば、眠気で気絶寸前の学生にも何かは伝わる。その伝でいえば、本書ほど、研究の面白さを読み手に伝えることに成功している学術書は近年稀なのではないか。

研究書を読んでいて笑ったのも初めての経験で、いかなる人がこの本を書いたのかの興味も湧く。勝手な想像だが、「更級日記」の主人公が「源氏物語」を手にした喜びを「得て帰る心地のうれしさ」と書いた場面、あの場面の女主人公の姿がなぜか頭に浮かんだ。

著者が「源氏物語」のかわりに手にしたのは二つ。品川弥二郎と御料地だ。ともに説明がいるだろう。品川といえば、長州閥の山県有朋系官僚として、まが発布された一八八九年、宮内省御料局長となった時期に焦点を絞ったのは慧眼だろう。御料地とは、皇室財産の中の広大な山林・原野・鉱山等の不動産のことで、御料局長はその管理部署のトップだった。

当時の御料地以外の皇室財産としては、国庫が支給する天皇家の歳費と、株券・有価証券等の貯蓄部分（御資）があった。

神がかった議論なく、あるべき姿問う

た教科書的には、初期議会期の第二回総選挙で激しい選挙干渉を行った内務大臣として知られていよう。だが著者が描くのは、明治初年、留学先のドイツで感得した林政・産業制度への深い理解を基に殖産興業策に邁進した技術官僚トップの品川弥二郎、自称「やじ」だ。

著者が内相時代の品川ではなく、その前、ちょうど明治憲法現在の皇室財産は国に帰属し、皇室費用は国会の議決によると憲法で定められている。よって、皇室財産とは、戦前と戦後で一変した領域といえる。立憲制度と皇室制度の二つを創出したのは伊藤博文だったが、帝国議会開設前に伊藤は、民権派が多くを占めると予想される議会からの皇室への干与を遮断すべく、国庫から皇室財産部分を切り離し、自律化を図っていた。

賢明な読者はすでにお気づきだろう。山林・産業分野に自信を持っていた品川が、広大な山林と良質な鉱山からなる御料地経営を任される。品川と御料地という二つのテーマがここに統合されたといえる。品川の得意やいかに。だからこそ、後に御料局長を辞め内相になれと打診されるや、「やじハ謹テ念仏」でも唱えて引きこもります、との置き手紙を山県に残し、那須塩原の別荘に遁走。あわてた山県が那須まで追いかけて翻意させるという一幕もあった。こんな明治人もいたのだ。

著者は、品川がいかなる御料地経営構想を持っていたかを解明する一方、品川と対立していた岩村通俊など他の宮内官僚の構想を明らかにし、比較することで、当時の人々の抱く皇室財産観を炙り出した。そこからわかったことは意外にも、皇室尊崇の精神や、皇室財政基盤の磐石化といった話が、登場してこないということだった。

御料鉱山は、日本の鉱工業の模範的存在たるべきで、技術も最先端であるべきだと品川などは意気込んでいた。だが、品川と異なる考えを持つグループからはクールな反論が返ってくる。いわく、そのような役割を御料鉱山に求めようとするのは、皇室財産の使途を国家の目的と混同する行為だ、との反論である。本来、国家がなすべき行政行為を、皇室財産によって代替するのは筋違いだというのだ。

一切、神がかった議論に落ちないのが面白く、あるべき皇室の活動とは何なのかという、現在にいたる問いを考えるヒントが満載の必携本である。

告白

（…-1728円）

小さな本である。ケージは、自分の音楽的な遍歴の実際を、二度講演という形で残した。一つは、京都賞の受賞記念講演、つまり日本でのもので、もう一つは、遥かに若いころ、一九四八年に行った講演、これは永らいピアニスト、教育者だが）との遣り取り、誰もが知る「現代」音楽の巨匠シェーンベルクへの師事、現代舞踏の巨人マース・カニングハムとの交流、あるいは日本の前衛作曲家小杉武久など、日本の読者

の関わりが指摘される。それが否定されているわけではないが、「座った」経験はない、と言い、大拙との関わりは、時間的には「後」であったというのも、面白い。

樹脂加工したカバーの紙の白味と触感に息を呑んだ。箔押しした蝶の文様や箔色は白い肌を際立てるため。（菊地）

『ナボコフ・コレクション　賜物　父の蝶』（ウラジーミル・ナボコフ著・沼野充義、小西昌隆訳・新潮社・6156円）より。

吹奏楽の屋比久勲

叱らぬ先生の出会い

赴任先の吹奏楽部を短期間では金賞へと導き、〝吹奏楽の神様〟として知られる、屋比久勲。その人を取材した。「コンクールのためではない」と明言する貌がここに。

山崎正彦

‖実務教育出版‖

2020年度版

試験

所養

役教

市新

……脳の可塑性を

アナット・バニ

動きが脳

活力と変化を生み

穏やかな動きで脳を

スポーツトレーナーも実

限界を超

脳・身体・障害への